

## 旧金津町の太子堂について

国 京 克 巳\*

### A Study of The Taishido of The Stone Buildings in Old Kanazu Town

Katsumi Kunikyo

This study is based on an actual survey of the stone buildings of the Taishido in the Old Kanazu Town. The summary is as follows :

- (1) The Taishido were built by the craftsmen connected with buildings the Taishido in 1892~1905 (Meiji 25~38) except Ii-Taishido built in 1800(Kansei 12).
- (2) The Taishido used to be maintained by Taishiko contorol, but now have been kept up by the local council in recent year.
- (3) The design of Taishido is the Hokyointo on the two rooves with a nokikarahahu.
- (4) Almost all the Taishido were damaged by the Fukui earthquake.

#### 1. はじめに

笏谷石は、越前を代表する石材として日本海側の各地でよく知られた石材で、その質や色合いから貴重な石材として、墓石、鳥居、基礎石等に利用されてきた。しかし、この石材の産地である福井県にある石造建造物についてはあまり知られていなかったが、近年徐々にその実体が明らかになってきた。坂井郡の旧六町（坂井町・春江町・三国町・芦原町（現あわら市）・金津町（現あわら市）・丸岡町）の神社に所在する笏谷石建造物を悉皆調査し、その実態を報告した「福井県石造建造物調査報告書 神社編 1（坂井郡）」もその一つである<sup>1)</sup>。この報告書によって、坂井郡各地の神社に石祠をはじめとする石造建造物が多数所在することが明らかとなった。この石造建造物の中に、聖徳太子を祀った太子堂というほぼ同じ形をした石塔が、旧金津町に6基あることがわかった。そこで、本稿はこれらの石造太子堂を実測調査し、その現状について述べたものである。

#### 2. 聖徳太子に関する建物

前述の「福井県石造建造物調査報告書 神社編 1（坂井郡）」によると、聖徳太子に関係する建造物は、7カ所報告されている。旧金津町伊井の応蓮寺の太子堂、同桑原の八幡神社の太子堂、同矢地の八坂神社の太子堂、同熊坂の太子堂、同滝の太子堂、同指中の太子堂と、坂井町下兵庫春日神社の厩戸神社で、いずれも笏谷石の石塔である。このうち、桑原太子堂は破損が著しく、その全容を現在確認できないが、残存部材から旧金津町にある5基の石造太子堂とよく似た建物であったことが想像できる。下兵庫春日神社の厩戸神社は、屋根に相輪状のものが載るが、形は石祠状で、太子堂のように宝篋印塔を変形した塔とは形が大きく異なっている。

一方、坂井郡内の木造建築では、三国町下野の太子堂、同山王6丁目三国神社の厩戸神社、坂井町東

---

\* 建設工学科 建築学専攻

の春日神社の太子堂が知られる。三国町下野の太子堂は、一間四方二層の銅板葺き宝形造りの小さな建物である。三国神社の厩戸神社や春日神社の太子堂は、一間社流造りの小さな建物である。このように、聖徳太子に関係する建造物とりわけ石造物が、旧金津町に集中していることが確認できる。

### 3. 伊井太子堂

#### 1) 歴史

伊井地区の応蓮寺にある太子堂は、本堂の右手前の道路脇に西を向いてある(写真-1, 2)。建立当初からこの場所にあったものでなく、以前は伊井地区の中央に位置する県道脇の区有地にあったもので、昭和42年の県道拡張のため、現在地に移設されたものである<sup>2)</sup>。太子堂は、背面基礎石銘から寛政12年(1800)7月の建立で、文政6年(1823)に建立当初の石材の一部をもちいて改築されている<sup>3)</sup>。その後、明治38年(1905)、昭和30年(1955)、昭和39年に修理がなされている。このうちの昭和30年は、同23年の福井地震で倒壊し、翌年仮復旧したものを大規模に修理したものである<sup>4)</sup>。この修理以前には、太子堂周囲に板石が敷かれ、その周囲に小さな堀があったといい、景観は現在とかなり違っていたようである。なお、これらの修理内容は、よくわからない。

一方、石塔の背面基礎銘には左端につづけて、「棟梁中嶋儀右衛門、世話役長右衛門、浅右衛門、弥三兵衛、市右衛門、石工猪助」とある。彼らは、太子堂再建に中心的な役割を担った者達であることが想像される。ちなみに中嶋儀右衛門は寛保2年から文政6年までの約80年の間、伊井地区周辺の神社の本殿棟札にその名がみえる優秀な大工であった。世話役の浅右衛門は、文政6年と時期的に近い寛政9年(1797)にあわら市下番の興源寺再興の棟梁を勤めた浅右衛門と同一人物とみられ、弥三兵衛は福井市石新保町の文化3年(1806)年建立の願念寺本堂を建設した大工と考えられる<sup>5)</sup>。

#### 2) 太子講

この太子堂は、建築関係の職人の集まる太子講の管理する石造物であった。しかし、年々太子講員が減少し、管理ができなくなり、現在の管理は伊井地区の熟年の集まりである親和会に引き継がれている。行事内容は、太子堂から太子像が年1回寺に移され、法要と説教が行なわれている。黒塗りの厨子に入った太子像は明治21年に造られたものである<sup>6)</sup>。ちなみに昭和8年頃に発足したとみられる伊井建築組合の規約第六条には「太子講(但し二月四日)ヲ維持ス」とあり、伊井建築組合が発足したのにもとない、太子講を引き継いだことがわかる。当初の太子講の参加人数はわからないが、伊井建築組合の発足時の昭和8年の会員は27名、年令が高くなり引退した会員外3名とある。その後、会員は徐々に少なくなり、昭和23年には11名となり、一時やや増加し15名前後となったが、昭和40年頃からまた減少し、昭和55年には10名をきるようになり、現在の状態となった<sup>7)</sup>。

一方、会員の職業をみると、文政6年には大工や石工がみえるが、その他に木挽・車力・壁屋が昭和初期に確認される<sup>8)</sup>。

#### 3) 太子堂

太子堂は扉を除くすべてが笏谷石製で、高さ1.33mの切石積み基壇の上に、二重の基礎と二重の層塔を置き、その上に請花を載せ、さらに宝篋印塔の塔身から上を載せたもので、総高約5.26mである。宝篋印塔の笠部が斜め上方に突き出し、屋根状になっている。そのため、一見すると三重塔のようにも見える。層塔の一層目は、屋根正面に軒唐破風を設け、軸部正面に扉を開き、内部に厨子を安置する。軸



写真-1 伊井太子堂

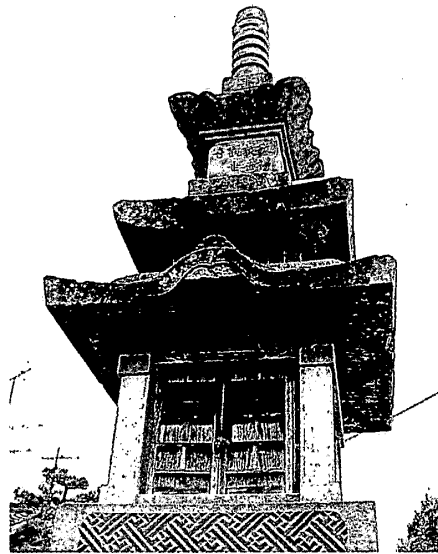


写真-2 伊井太子堂詳細

部は一石で造られ、四方の壁には柱型や長押を彫り出す。一層目の屋根は大きく、前後2石を合わせて造られ、軒裏に一軒の平行垂木を彫り出す。正面の軒唐破風右付近から中央にかけて割れている箇所があり、仮修理の痕がある。二層目も一層目と同様で、壁に柱型・長押を彫り、正面に渦巻き紋を二つ彫込む。軒裏には一層目と異なり、扇垂木を彫り出す。宝篋印塔の塔身四面には「敬禮救世観音 伝燈東方栗散王 従於西方来誕生 開演妙法度衆生」とあり、聖徳太子を意味する救世観音を礼讃し、仏法の精神を彫込んでいる。笠部は隅飾り突起が退化し、直線状に近くなる。相輪の一部が欠損しているように見えるが、ほぼ原形を留めているとみられる。

基礎銘により寛政12年の創建で、文政6年に旧部材をもちいて再建され、その後幾度か修理されているが、石材の風蝕状態や加工痕、さらに柱と長押や壁のチリ寸法からみて、その多くの部材が文政6年以前のものであることは間違いないと思われる。

#### 4. 桑原太子堂

##### 1) 歴史

桑原地区の太子堂は、八幡神社境内の北東隅の道路際入口に、東を向いてある(写真-3)。建設当初からこの地にあり、昭和23年の福井地震により大きな被害を受けたという。そのため部材が欠損し、押し潰されたようになり、バランスが悪い。太子堂の建設年は不明で、発起人は4名いたことが基礎銘から確認できるが、氏名は風化が著しくわからない。

##### 2) 太子講

2月と12月の22日に、堂前で死亡講員の追悼会をおこなっていたが、福井地震後は堂が破損したので、講の年番宅にておこなわれていた。現在、太子像と法名軸を当区の専念寺に預け、区長が太子堂の管理をするのみで、太子講はなくなっている。大正8年(1919)新調の法名軸をみると、明治34年の法名が一番古く、講の創設は明治34年前後とみられる。一方、一番新しい法名は昭和49年で、昭和50年代初め頃まで講があったことがうかがえる<sup>9)</sup>。当区にも伊井区と同じように職人は数多くいたようで、昭和27年当時兼業や見習いを含めて大工7人、石工1人、車力1組が「伊井村誌」にみえる<sup>10)</sup>。

### 3) 太子堂

太子堂は総高約3.85mの笏谷石製で、高さ1.28mの切石積み基壇の上に、二重の基礎を載せ、その上に二重の層塔を置く。一層目の屋根が直接基礎の上に載っているが、福井地震以前にはこの間に扉をもつ軸部があり、内部に厨子を安置していたという。一層目の屋根上に、請花と聖徳太子を示す救世観音と彫られた塔身から伊井の太子堂と同じく宝篋印塔を載せたようにみえるが、塔身上部は明らかに層塔の屋根の形をしている。また、各部材の取合いを詳細にみても、上下の位置関係に間違いがみられない。このことから、この太子堂は多宝塔の二層軸部に宝篋印塔の請花と塔身を採用したものと考えられる。屋根は軒唐破風がなく、一層二層とも軒裏に二軒の平行垂木を深く彫り込み、隅棟を彫り出す。屋根上の伏鉢に他の太子堂にみられない格狭間を彫り込み、相輪を載せる。相輪の高さが異様に低いので、この部分も地震によって破損したことが考えられる。以上のことを総合すると、破損以前の太子堂は総高約4.75m位で、他の太子堂とは多少形態の異なった石塔であることが想像される。建立年代は石の風化状態や鑿痕、さらに他の太子堂の様式などから考えて、太子講がつくられたとみられる明治後期頃と考えられる。

## 5. 矢地太子堂

### 1) 歴史

矢地地区の太子堂は、八坂神社境内の北西に位置し、本拝殿の敷地より一段下がった手前左側に東を向いてある(写真-4, 5)。太子堂は、明治34年12月下旬に当境内に建立された<sup>11)</sup>。発起人は当区の大工をはじめとする職人34名で、この他に当区の37名が寄付者として名を列ねている<sup>12)</sup>。この両者の合計は、大正9年当時の戸数65戸よりわずかに多く、矢地地区のほとんどの者が関わっていたことがわかる<sup>13)</sup>。

### 2) 太子講

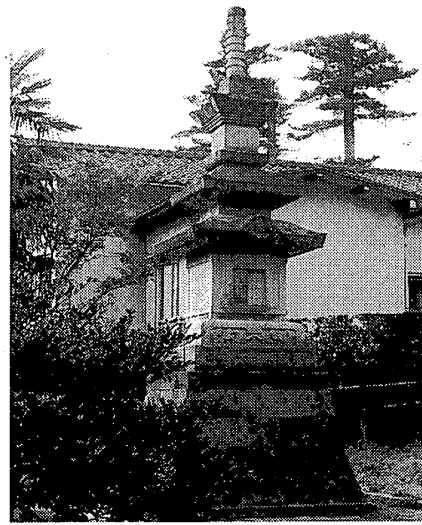
太子講は、12月の山祀りの日に行なわれ、大工・木挽・山師が参加し、情報交換や親睦をはかっていたと言うが、「伊井村誌」には2月4日に行なわれていたと記載されている<sup>14)</sup>。2月は聖徳太子の命日であり、山祀りは建築関係職人の休日であり、両日に講が行なわれていたものと思われる。太子講で注目すべきことは、前述の伊井や桑原と同じく大工(8人)が多かったことの他に、背後に里山をひかえており木挽・山師がおり、さらに当地区で瓦焼きがおこなわれていたので、その職人も講員に入っていたことである。現在、太子講はなく、八坂神社氏子総代が管理しているが、太子講に関する資料等の有無はわからないという。

### 3) 太子堂

太子堂はすべて笏谷石製で、総高約5.15m、高さ1.28mの切石積み基壇の上に、二重の基礎を載せ、その上に二重の層塔を置き、その上に請花を載せ、さらに宝篋印塔の塔身から上を載せている。この太子堂は、部材の構成や形さらに大きさを伊井太子堂とよく似ている。異なる部分は、正面の基礎に彫る模様や図柄、正面軸部の柱型の本数、二層軸部の彫込み文字、請花などの細部意匠である。これらの細部は、明治時代の笏谷石石造物によくみられる意匠や技術である。矢地地区は伊井地区と竹田川を隔てた位置にあり、太子堂建設の際に江戸時代後期よりあった伊井太子堂をモデルにしたことが十分想像できる。



写真－３ 桑原太子堂



写真－４ 矢地太子堂



写真－５ 矢地太子堂詳細



写真－６ 熊坂太子堂

矢地太子堂は他の太子堂と異なり、福井地震による被害は少なく、一部に自然風化による損傷があるものの、当初の姿がよく残り、明治時代の石造技術をよく残した石塔である。

## ６．熊坂太子堂

### １）歴史

熊坂地区の太子堂は、「お太子様のお墓」と呼ばれ、当集落のほぼ中央の道路脇にある通称「踊場」という区有地に、西を向いてある（写真－６）。太子堂は、基礎銘により明治36年に建立されている<sup>15)</sup>。この銘には発起人多数の他に、敷地寄付者、当区一般住民の寄付者、さらには近隣の集落である青ノ木・笹岡・牛ノ谷などの人達の名前もみられる。また、基礎下の基壇上部にも名が彫られ、その地域は権世市野々・権世・下金屋・宇根・沢・滝・牛ノ谷・御簾尾さらには金津・丸岡にまで及び、旧坪江村を中心とする相当広い地域の多くの人達の寄付によって建設されたことがわかる。

### ２）太子講

講は大工・石工・木挽・車力などの多くの職人によって構成され、講員持ち回りの宿で、毎年２月20

日に法要が営まれていたようであるが、昭和末期頃から講員で維持できなくなり、区によって引き継がれている。太子講に関する資料はなく、以前は太子像が太子堂に安置されていたが、堂の老朽化のため区長管理の元に区集落改善センターに保管されている<sup>16)</sup>。

### 3) 太子堂

太子堂はすべて笏谷石製で、総高約4.4m、切石積み基壇の上に、二重の基礎を載せ、その上に二重の層塔を置き、その上に受花を載せ、さらに宝篋印塔の塔身から上を載せている。軸部の扉の意匠や二層軸部の文字の書き入れが矢地太子堂とよく似ており、大きさは基壇の石積みの段数も一段少なく、矢地太子堂をやや小振りにした感がある。層塔屋根の軒裏をみると、一層目は平行垂木、二層目が扇垂木で、これもまた同じ仕様となるが、軒唐破風正面には蟬股と斗を彫込んでいる点は意匠的に凝っている。宝篋印塔の塔身には正面に文字の彫り込の代わりに額を設け、その中に鶴を彫り出すなど新しい意匠がみられる。しかし、軸部に長押がなく、笠部の隅飾り突起はさらに扁平となり、その名残を示す絵様が大きく彫られるのみで、全体的に細部が堅くなっている。このようなことから熊坂太子堂は、矢地太子堂を参考に製作されたものと考えられる。

当区には熊坂石の石切場があり、石工も多数いたことが確認される。石材の質や色があまりよくなく、炉石や井戸側に使用され、装飾用材として使用されていなかったため、太子堂は笏谷石が用いられている。

## 7. 指中太子堂

### 1) 歴史

指中地区の太子堂は、JR細呂木駅から北西に700m余りの指垣地の、旧道の交差する位置に北東を正面に向けてある(写真-7, 8)。太子堂は、層塔の軸部背面の銘により明治34年6月に建立されている<sup>17)</sup>。昭和23年の福井地震時に倒壊し、その後旧前のように復旧された。発起人は森川清右衛門達9名で、石工は加賀江沼郡敷地(現加賀市)の松原乙吉である。松原乙吉は発起人にも名を連ねており、太子講員には指中区の職人だけでなく、他地区の職人も参加していたことがわかる<sup>18)</sup>。再下部の基礎石には寄付者59名の名前が記されている。寄付者には指中区の他に、滝・細呂木・沢・坂口・樋山・蓮ヶ浦・橋谷の者が含まれ、細呂木村西部の指中周辺地域の職人達とみられる<sup>19)</sup>。

### 2) 太子講

現在、太子講はなく、管理は指中区长がおこなっている。太子講員であった古老の話によると<sup>20)</sup>、昭和21年頃には3月9日と12月9日の年2回太子講をおこなっており、その内容は午前太子堂の清掃、午後持ち回りの宿で夜中まで飲食を共にしたという。もちろん、職人の手間賃もその時に決定していた。太子講員はすべて指中区の職人で、大工・石工・指物・瓦屋など15～16名を数えた。他地区の太子堂でおこなわれているような太子像を開帳して、法要を行なうようなことはしなかったという<sup>21)</sup>。なお、太子講に関する資料は残っていない。

### 3) 太子堂

太子堂はすべて笏谷石製で、総高約4.4m、切石積み基壇の上に、二重の基礎を載せ、その上に請花と二重の層塔を置き、さらに宝篋印塔の塔身から上を載せている。基壇上部は石垣の反りより外側に飛び出し、基礎が三重のように見える。一重目の基礎正面に竜の彫物を彫り、二重目の基礎は燭台の脚の



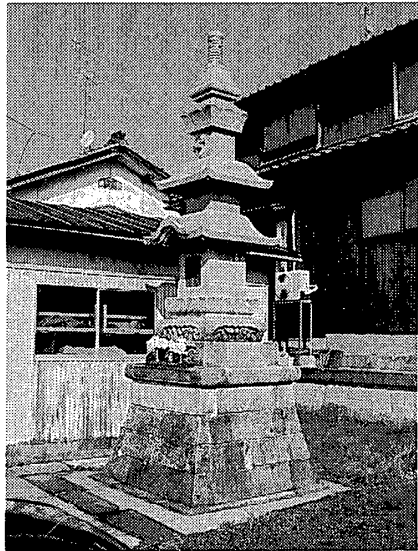
写真－7 指中太子堂



写真－8 指中太子堂詳細



写真－9 滝太子堂（修理前）



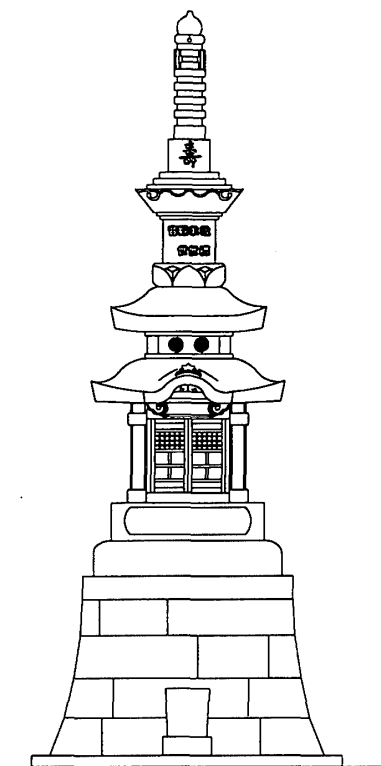
写真－10 滝太子堂（現在）

ような細工がなされる。軸部は正面に石扉を入れ、残り三方は壁を彫込み柱や梁を浮き出させる。屋根は一二層目とも軒裏に二軒の垂木を彫り、初層のみ軒唐破風をもつ。宝篋印塔の塔身正面に鳳凰を浮彫し、笠部の隅飾り突起は側面の彫りのみとなり、外形は算盤の珠状になる。伏鉢も段型を算盤の珠状に彫り、遠めからは笠が二重に重なったように見える。そしてその上に高さの低い相輪を置く。福井地震による軸部や屋根に大きな破損がみられるが、細部詳細は当初の形がよく残っている。全体的に装飾性の高い石塔である。

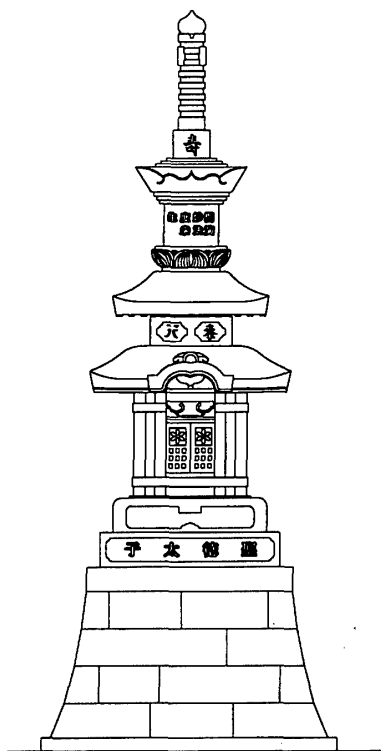
## 8. 滝太子堂

### 1) 歴史

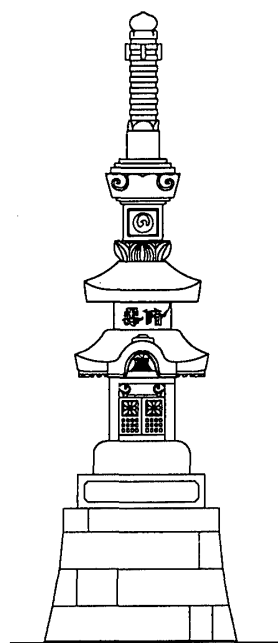
滝では太子塔と呼び、当地区のほぼ中央に位置し、道路脇の敷地に正面を西に向けて建っている。（写真－9，10）。創建は明治25年5月で、現在の太子堂は同38年5月に再建されている<sup>22)</sup>。その後、昭和23年の福井地震により破損したものを修理している。地震後の修理は、石材の加工痕やドリル穴痕が



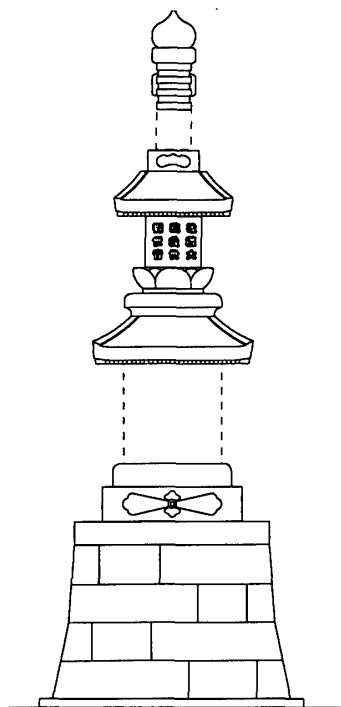
伊井太子堂



矢地太子堂



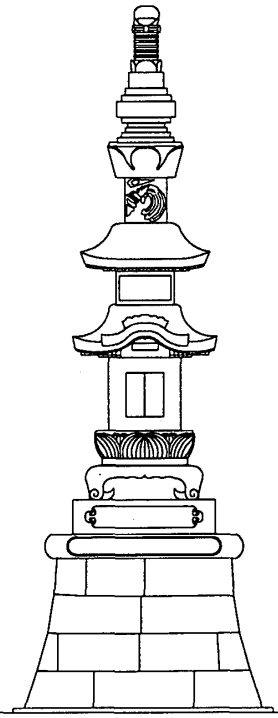
熊坂太子堂



復原桑原太子堂



指中太子堂



滝太子堂

図-1 太子堂正面図

0 0.5 1 2m



ら軸部のみであったとみられる。しかし、一層目屋根や宝篋印塔部の破損が著しくなり、平成15年に一層目の屋根から上を新しく御影石で造り直し、修復している。創建発起人は9名、世話役16人、寄付者は滝区の者となっている<sup>23)</sup>。再建時には44名が名を連ねているが、他地区の者はみられず、すべて滝区の者となる。その時の石工は細呂木村宮谷の神尾乙吉である<sup>24)</sup>。

## 2) 太子講

大工・石工・瓦職人などによる太子講により、太子堂の管理がなされていたが、本年より区が管理するようになっている。運営については未定とのことで、太子講が細々と存続する。

## 3) 太子堂

太子堂は扉が木製、基壇から軸部までが笏谷石製、一層目の屋根から上が御影石となる。高さは約4.9mで、切石積み基壇の上に、二重の基礎を載せ、その上に請花と二重の層塔を置き、さらに宝篋印塔の塔身から上を載せている。御影石の部分は平成15年に旧形態に倣い修復されているので、修理前の写真から様子をのべる。基壇石垣は角石をやや反り上げてつくり、他の太子堂にはみられない本格的な石垣積みとなっている。一層目の基礎正面に竜の彫物を彫り、二層目の基礎は燭台の脚のように細工がなされ、脚間に蓮の花と石仏を彫り出した装飾的な基礎となる。軸部は昭和23年に新しく造られた部分で、正面に穴を穿ち、木扉を入れる簡素な造りである。屋根は一層目とも軒裏に二軒の垂木を彫り、初層のみ軒唐破風をもつ。二層目の軸部は文字を彫り出すが、風化して判読がしにくくなっている。宝篋印塔の塔身正面に雲と鳳凰を浮彫し、笠部の隅飾り突起や下部の段型はなくなり、笠側面に王冠を彫込んだような飾りがつく。伏鉢も同様に算盤の珠状になり、遠めからは笠が二重に重なったように見える。相輪は上部を欠損するが、土に埋まっていた部分を継ぎ足すと、請花・九輪・宝珠がつく。現在の太子堂はほぼ旧状どおり造られているようであるが、相輪部は多少低くなったとみられる。滝太子堂は、全体的に指中太子堂とほとんど同じ部材構成や意匠で、装飾の彫物が多少立体的になっているといえる。このように両太子堂が似るのは、滝太子堂が指中太子堂の4年後の近接した時期に再建され、石工が同一人物のためである<sup>25)</sup>。

## 9. 太子堂の比較

以上の6太子堂の実測による正面図は、図-1のようになる。桑原太子堂は一層目の軸部が欠損しているので、基礎石の大きさや他太子堂のバランスを考慮し、復原して作図している。この図から明らかに石塔の全体構成はよく似ているが、その細部から太子堂は3種類に分けられる。第一は伊井太子堂・矢地太子堂・熊坂太子堂で、一層目正面に軒唐破風をもち、二重の層塔の上に宝篋印塔を載せ、全体が三層の屋根をもつようにみえるもので、軒裏の垂木が一層目を平行垂木で、二層目を扇垂木とするものである。第二は指中太子堂・滝太子堂のように一層目正面に軒唐破風をもち、二重の層塔の上に宝篋印塔を載せるが、宝篋印塔が大きく変形して、全体が四層の屋根をもつようにみえるもので、軒裏の垂木が一層目とも二軒平行垂木となるものである。第三に桑原太子堂にみる二重の層塔のような外観をみせるもので、軒唐破風をもたず、軒裏の垂木が一層目とも二軒平行垂木となるものである。前二者の太子堂は、宝篋印塔部の細部意匠や請花の位置に多少の違いがみられる程度で、同一系統と考えてよい。一方、桑原太子堂は、軒唐破風をもたず、宝篋印塔の笠部のない特殊な太子堂である。このような形態の太子堂がどうして造られたかについては、現在資料がなくわからない。

## 10. まとめ

旧金津町の太子堂についてまとめると、以下のことが言える。

- 1) 寛政12年創建の伊井太子堂を除き、旧金津町の太子堂は、明治25～38年頃にかけて造られた。
  - 2) 太子堂は、大工をはじめとする建築関係の職人によって造られた。
  - 3) 堂を管理していた太子講は昭和50年代頃から徐々になくなり、区やそれにかわる団体が近年管理している。
  - 4) 太子堂は、正面に軒唐破風をもつ二重の層塔の上に宝篋印塔を載せた石造建造物が一般的である。
  - 5) 多くの太子堂は、福井地震による被害を受けて破損しているものが多い。
- このような石造太子堂の形態が石造建造物の中でどのような位置付けにあるのか、またどのようにして生まれたのかは、今後の研究課題としたい。

## 謝辞

調査に際して、伊井の円道昭一氏ならびに桑原、矢地、熊坂、滝、指中の各区長をはじめ多くの方々には調査の協力を、伊井の平井久由氏には資料閲覧の便宜をお計らい戴きました。ここに記して感謝申し上げます。

## 註

- 1) 「福井県石造建造物調査報告書 神社編1 (坂井郡)」若越建築文化研究所 平成14年
- 2) 太子堂の壁面に「コノ堂ハ今ヨリ約百七十年前二建テシモノヲ去ル昭和二十三年福井大震災デ倒壊シ講員ノ手デ区民一般ノ協力ヲ得テ再建サレタガ御本体ニハ細少ノ傷デアツタコトハ実ニ不思議ニ思フ所ガ昭和四十二年道路拡張ノタメ移転ヲ余儀ナクサレ当初二建立スルモノナリ仍ツテ後日ノ為之ヲ記ス 昭和四十二年五月 太子講員一同」
- 3) 太子堂基礎に「□時 寛政十二庚申七月建立之 再 文政6年癸未新石混造」
- 4) 円道、平井両氏の話と「太子講文書」による。
- 5) 「伊井白山神社誌」伊井白山神社誌編集委員会 平成15年 p34 伊井大工の歴史
- 6) 聖徳太子像の銘に「明治二十一年六月十九日新調 寄進中嶋磯右衛門 坪田弥右衛門」とある。
- 7) 中嶋隆治氏調査の「伊井建築組合規約」および太子講宿名と年会費を記した「太子講 (伊井建築組合員)」による。
- 8) 前掲7)
- 9) 桑原専念寺の住職による太子講の法名軸の調査報告による。
- 10) 「伊井村誌」伊井村役場 昭和29年 p430
- 11) 基礎銘に「明治三拾四年 拾貳月下旬 建之」とある。
- 12) 当区長の辻氏によると、発起人に何人もの大工の名が見え、寄付者は村の者という。
- 13) 前掲10) p384。
- 14) 前掲12) なお、前掲10) の「伊井村誌」によると太子講は2月4日に年1回開催されたとある。
- 15) 基礎銘に「発起人 明治三十六年加口 (後略)」とある。
- 16) 「熊坂区誌」熊坂区誌編集委員会 平成12年 p55
- 17) 軸部背面銘に「明治三十四年 六月建之」とある。
- 18) 正面の石碑に「発起講中 森川清左エ門 田端清兵衛 谷本重口助 伊藤新吉 □□□次郎 □原乙吉 杉本長太郎 □畑仁三郎 □橋弥助 加賀江沼口敷地 石工 松原乙吉」
- 19) 「細呂木村誌」細呂木村誌委員会 昭和38年によれば、発起人として指中の木挽橋本庄平をあげるが、橋本は発起人にはなく篤志寄付者の中にあり、このことから寄付者は職人と考えられる。p487
- 20) 大工山元新一、石工後藤輝雄両氏の話による。
- 21) 前掲13) 「細呂木村誌」によれば、太子講は年1回とあり、昭和30年代頃には山祀りと太子講の区別がなくなったのであろう。p488
- 22) 軸部背面銘に「明治廿五年五月建立 明治三十八年五月再建昭和二十三年六月二十八日大地震ニ依リ再々建ス 平成十五年十月修復」とある。
- 23) 基礎左側面に「建立發起 九名 世話人十六名 篤志 瀧大字中」とある。アンケートによれば、近隣の金屋・沢・柿原の人達から米や金銭の寄附があったという。
- 24) 基礎右側面に「細呂木村宮谷 石工神尾乙吉」とある。現在は石材とも新しくされ、平成修復の施主名を追加する。
- 25) 指中太子堂は江沼郡敷地の松原乙吉の作であるが、地元指中では宮谷の石工によって造られたと言いつた。宮谷の神尾乙吉の弟の子孫によれば、乙吉は敷地から養子に入ったといい、松原家が親戚であったというから、同一人物である。

(平成16年12月1日受理)